

Title	外国語学部学生の学力構造Ⅱ：専攻語学成績を中心として
Author(s)	大澤，春吉
Citation	大阪外国語大学学報. 43 p.35-p.45
Issue Date	1979-02-19
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80727
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

外国語学部学生の学力構造 II

——専攻語学成績を中心として——

大 澤 春 吉

THE STRUCTURE OF ACADEMIC ACHIEVEMENT AMONG UNIVERSITY STUDENTS OF FOREIGN STUDIES: II. FACTOR ANALYSIS

HARUYOSHI OSAWA

The subjects in this study were 300 male and female graduates carefully sampled from the class of 1975 – 1977 in three language departments (English, Spanish, Russian) of Osaka University of Foreign Studies.

Firstly, a factor analysis of 18 variables from high school academic records and matriculation exam scores was carried out, in order to ascertain the findings of the previous study. Five factors were identified similarly to the first report. They were supposed to indicate the basic academic achievement factors necessary for success in college of foreign studies.

Secondly, the relationship between those basic academic achievement factors and the registered college academic achievement was examined. The results again replicated those of the previous study: ‘high school general achievement’ factor and ‘Japanese achievement’ factor showed low but significant positive correlations with most of the college achievement variables, while ‘mathematics achievement’ and ‘social studies achievement’ factors failed to find any clear relations with them. Correlations of ‘English achievement’ factor were limited to Foreign Languages under General Education, and to elementary First and Second Courses of Language Practices under Professional Education. This factor lost correlations with more advanced parts of Professional Education.

Finally, 18 variables of college academic achievements together with 5 variables of basic academic achievement factors were subjected to factor analysis. Five factors were identified, and tentatively labelled as ‘basic academic ability’ factor, ‘majoring foreign language’ factor, ‘English achievement’ factor and ‘Japanese achievement’ factor, in order of size. It seemed that the ability structure of present study might consist of those factors.

問 題

かつて、戦後の新教育に対する批判として学力の低下が問題にされ、いわゆる学力論争が展開されたが、その際、まずその実態の客観的・実証的の把握が要請され、多くの調査研究が行なわれた(木下, 1971)。このことは、学校や大学で何を学ばせるべきかを問う歴史的・社会的観点からの学力へのアプローチと、現に学校教育で習得されているものの性格を分析する心理学的観点からのアプローチの相補性を示す良い例であると思われる。

学業成績や学力テスト得点で操作的にとらえられる学力は、個々の教科の学力においても、またもっと一般的なしは全体的な学力においても、それを構成するさまざまな要因からなる構造をもつものと考えられる。この学力の心理学的構造について考える場合、つぎの二つの面が問題になる(続, 1973)。一つは学力がどのような形成と発現の構造的連関をもっているかという面と、もう一つは、学力自体の内部構造、つまりさまざまな学習内容についてのそれぞれの学力を総合的に、全体的学力とした場合の部分的学力相互の関連構造を問う面である。本研究は、この後者の面を問題としている。

大学での学力に関しては、大学入試の問題が当面の緊急の課題である。大学入試の問題点を論じるためには、大学側の追跡研究の必要性が指摘される(西堀, 1978)。また、学力構造そのものに関する研究においても、大学におけるものはきわめて少なく、小・中・高校での主要教科を扱ったものが大部分であるといえる(cf. 清水, 1978)。大学教育の大衆化とともに、大学での学力の問題が、歴史的・社会的観点からも、心理学的観点からもいっそう切実な問題として研究されるべき時がきていると思われるのである。

さきの第I報においては、文科系でもユニークな学部である外国語学部の学生が、どのような学力上の特徴をもっているかを明らかにした(大澤, 1978a)。つまり、大学での学業成績の基礎学力を構成しているとみられる大学入学試験成績および高校成績(調査書)を統計的に分析し、入試では英語の成績がもっとも良く、数学・国語は個人差が著しく、成績の低いものもかなり含まれていること、また、高校成績ではやはり英語がもっとも良く、国語・社会・数学・芸術がこれに次ぎ、理科・保健体育の評定値がもっとも低いことなどを見い出した。そして、世界史選択受験者群を対象とする高校・入試成績の因子分析から得られた5つの基礎学力因子のうち、「高校学力一般因子」「国語学力因子」「英語学力因子」の3つの因子は、大学学業成績と低い統計的に有意な相関が見い出された。

今回は、これらの基礎学力各因子と大学学業成績との関係について、調査対象を拡大・統制して、より一般化できる結果を求めるとともに、大学学業成績のうち、とくに中心的な専攻語学実習成績をさらに下位変数にわけて、他変数との因子的関連性を調べる。

方 法

調査対象 大阪外国語大学外国語学部(第1部)に1972～1974の各年度に入学し、1975～1977の各年度に卒業した者のうち、卒業者数の比較的多い英語・イスパニア語・ロシア語の3学科から、それぞれ100名(男女各50名)ずつ無作為に抽出した合計300名を対象とする。なお在学期間は、4年間のものが275名と最も多く、5年間のもの23名、6年間のもの2名を含んでいる。

調査変数 大学学業成績18変数、大学入学試験成績11変数、出身高等学校調査書成績7変数の合計36変数とする。

大学学業成績としては、専攻語学の実習成績を中心にとりあげるため、第I報(大澤, 1978a)の専攻科目のうち専攻語学に関する「実習第1・第2課程」と「実習第3課程」の2変数を、それぞれの構成科目に細分し、次の①から⑨の9変数に増やした。すなわち、第1・第2課程の①講読(4,8,4), ②作文(4,2,4), ③文法(2,4,6), ④LL(2,4,2), ⑤会話(8,4,4), 第3課程の⑥講読(4), ⑦作文(4), ⑧会話(4), ⑨講読・作文・会話の中からの選択必修(12), の9変数に細分した。なお、第1・第2課程の()内の数字は順に英語、イスパニア語、ロシア語の必修単位数、第3課程の()内の数字は3学科とも同じ必修単位数を示す。

これら専攻語学の実習は、第1課程(1年次10単位)、第2課程(2年次10単位)、および第3課程(3・4年次24単位)の段階制をとっており、第1課程および第2課程では専攻言語の基礎的能力を修得し、第3課程では専攻言語の応用的能力を修得するものとしている。

大学学業成績の他の変数としては、専門教育科目として、専攻語学実習に関する上記の9変数のほか、専攻科目の⑩講義・演習, ⑪卒業論文, および各専攻に共通した⑫関連科目(言語学・歴史学・政治学・経済学など)を加えた12変数である。また、一般教育科目に関しては、⑬人文科学, ⑭社会科学, ⑮自然科学の3変数とし、このほか⑯外国語科目, ⑰保健体育科目, ⑱取得単位総数の合計18変数である。⑩から⑱までの各変数は第I報と同じであり、必要単位数もそこで述べた通りである。

これらの大学成績の数量化の方法も第I報にしたがい、授業科目ごとにA・B・Cで学籍簿に記入されている評価点を、4単位の場合、Aを30点、Bを20点、Cを10点(2単位の場合はそれぞれ2分の1の点数)に換算し、必要単位数をこえて履修している者については、その必要単位数まで良い成績の評価点から順にうめて平均値を求めた(小数第1位を四捨五入)。

基礎学力に関する変数として、次のような大学入学試験成績および高校調査書成績を取りあげた。入学試験成績は、英語の総合問題(問題I), 英文和訳(問題IIと問題III), 和文英訳(問題IV(1)と(2)), 数学の問題I～問題IV, 国語の現代文, 古文, 漢文, そして社会(世界史または地理)の11変数とした。高校調査書成績は、国語・社会・数学・理科・英語・保健体育・芸術の7変数である。

分析手続 まず、基礎学力因子の抽出のため、入試成績11変数と高校成績7変数の合わせて

18変数の間の内部相関行列（ピアソンの偏差積率相関係数）にもとづく因子分析（主因子法→バリマックス回転，因子抽出は固有値1.0以上）を行なった。なお，入試成績11変数については，あらかじめ，各年度ごとに（社会はさらに世界史・地理ごとに），外国語学部（第1部）全受験者の平均得点と標準偏差にもとづいて標準得点化し，年度による入試問題の難易度の効果を相殺した。

次に，上述の因子分析によって求められた因子負荷行列とデータ行列（入試成績・高校成績の18変数についての個人別標準得点）を用いて，最小二乗法による因子スコアの推定を行ない，この基礎学力各因子スコアと大学学業成績18変数との内部相関行列（ピアソンの偏差積率相関係数）を求めた。

さらに，これら大学学業成績18変数と基礎学力各因子スコア5変数の合わせて23変数の内部相関行列を原相関行列とする因子分析（主因子法→バリマックス回転，固有値1.0以上を抽出）を行なった。

なお，これらの計算には，京都大学大型計算機センターにおいてFACOM M-190版 SPSS を利用した。

結果と考察

1) 基礎学力の因子構造

入学試験成績11変数および高校調査書成績7変数の合わせて18変数からなる内部相関行列にもとづく因子分析によって，TABLE 1 の因子負荷行列を得た。因子抽出のための固有値を1.0以上とすると6因子が抽出され，このうち第Ⅴ因子までをつぎのように解釈した。

まず，基礎学力第Ⅰ因子は，高校調査書各教科の全般にかなり高い負荷を示すが，入学試験成績にはほとんど負荷していない。したがって，この因子は第Ⅰ報でも指摘したところの「高校学力一般因子」とみなされる。

つぎに，基礎学力第Ⅱ因子は，入学試験国語の現代文と古文に.5前後のかなりの負荷を示し，高校成績では国語に.27とやや負荷を示す傾向がみられるが，その他の教科にはほとんど負荷しないことから，「国語学力因子」と考えられる。

基礎学力第Ⅲ因子は，入学試験の社会と高校調査書の社会のいずれにも負荷しており，「社会学力因子」とみなされる。なお，この因子には入学試験英語との間に和文英訳を中心に負の負荷がみられる。

基礎学力第Ⅳ因子は，高校調査書英語にもっとも高い負荷を示し，数学と国語にも負荷しているが，入学試験成績では英語の総合問題に負荷を示す傾向があり（.288），英語以外の教科には全く負荷していないことから，「英語学力因子」と考えられる。

基礎学力第Ⅴ因子は，入学試験成績の数学と高校調査書の数学と理科に負荷しており，一応，

TABLE 1 入学試験および高校調査書成績各変数のバリマックス回転後の因子負荷行列 (N=300)

因 子 變 数				I	II	III	IV	V	VI	h^2
				(高校学力一般)(国語学力)(社会学力)(英語学力)(数学学力)						
1	入 試 成 績	英 語	総合問題	.040	.154	-.201	.288	-.291	-.184	.267
2			英文和訳	-.166	.265	-.164	.171	-.152	-.052	.179
3			和文英訳	.009	.006	-.366 *	.134	-.239	-.024	.210
4		数 学	問 題 I	.088	-.051	.017	.050	.385 *	.130	.178
5			問 題 II	.074	-.162	.036	-.016	.289	-.056	.120
6			問 題 III	-.040	.132	-.015	-.058	.541 *	-.114	.328
7			問 題 IV	.036	-.086	.054	-.048	.269	.199	.126
8		国 語	現 代 文	.130	.524 *	.000	-.036	-.138	-.014	.312
9			古 文	.065	.460 *	-.015	-.007	.081	.242	.281
10		漢 文	漢 文	-.003	.113	-.030	.020	.005	.442 *	.209
11			社 会	-.015	-.042	.569 *	.081	-.041	-.040	.336
12	高 校 成 績	国 語	国 語	.753 *	.270	.092	.360 *	-.037	.054	.783
13			社 会	.775 *	.137	.358 *	.191	-.087	-.139	.810
14			数 学	.538 *	-.151	.099	.499 *	.387 *	.071	.726
15			理 科	.725 *	.008	.087	.262	.324 *	-.024	.707
16			英 語	.431 *	-.041	.024	.676 *	-.098	.061	.659
17			保健体育	.634 *	-.073	-.143	-.090	.077	-.060	.445
18			芸 術	.521 *	.060	-.126	.019	.021	.144	.313
固 有 値				3.554	1.249	.719	.630	.509	.331	6.991

因子負荷量.300以上を解釈の主たる対象とし、*印を付した。

「数学学力因子」とみなされる。この因子には、上述の第Ⅲ因子と同様に、入学試験英語の各変数の間に負の負荷を示す傾向がある。

なお、第Ⅵ因子は、入学試験国語の漢文に負荷しており、古文にも負荷を示す傾向はあるが、高校調査書の国語には全く負荷を示さない。したがって、この因子を解釈し命名することは困難である。

さて、上述のように、本学に入学し卒業していった学生の入学試験および高校調査書成績を、高校での学習の到達度を示すものとし、大学教育のための基礎学力とみなし、これらの成績の因子分析から「高校学力一般」「国語学力」「社会学力」「英語学力」「数学学力」の5因子を見出した。これは本学受験者群 (N=1,676) を対象とした第Ⅰ報 (大澤, 1978a) において解釈命令された5因子と一致している。因子の大きさの順序も「高校学力一般」を第Ⅰ因子とすること、大きい方から「社会学力」「英語学力」「数学学力」の順序も一致した。しかし、第Ⅰ報でもっとも小さな第Ⅴ因子であった「国語学力」が、今回は第Ⅱ因子として比較的大きな因子として得られ、受験者群との比較において顕著な違いを示した。つまり、全受験者群としてはもっとも個人差の小さな「国語学力因子」は、入学試験によって選抜されて本学に入学し卒業していった群では学力上重要な役割をもった因子であることを示唆していると考えられる。

つぎに、これらの基礎学力各因子と大学成績との関連を明らかにする。

2) 基礎学力各因子と大学学業成績との相関関係

基礎学力各因子の因子負荷行列 (TABLE 1) と個人別の入学試験・高校調査書各変数の標準得点を用いて、各個人が各因子をどれほど所有しているか、つまり個人別の因子スコアの推定を行ない、これと大学成績の各変数との相関係数を求めたものが、TABLE 2 である。

これらの基礎学力各因子の因子スコアと大学学業成績各変数との相関係数は、全般にわたって低い傾向にある。これは、大学入学試験によって選抜をうけた集団、つまり学力に関して等質的な集団を調査対象としていることによる。もし入学試験における不合格者も合格者と一緒に大学において修学させた場合には、これらの相関係数はかなり高くなるはずである。例えば、本学の1972～1975年度の各年度の入学試験英語と国語との間の相関は、合格者群では.12～.20でほとんど相関がなかったが、全受験者群では.52～.55のかんりの相関がみられた (大阪外大入学者選抜方法研究委, 1976)。ひるがえって今回の基礎学力各因子と大学学業成績との相関関係についても、低い相関係数ではあるが十分検討に値する意味を含んでいるものと考えられる。

TABLE 2 大学学業成績と基礎学力各因子の相関行列

変 数				19	20	21	22	23
				基礎学力 各 因子の 因子スコア				
				I. 高校学力一般	II. 国語学力	III. 社会学力	IV. 英語学力	V. 数学学力
1	大 学 成 績	専 門 攻 撃 教 育 科 目	実 講 読	184 **	118 *	-038	074	-006
2			習 作 文	235 **	177 **	-030	198 **	-068
3			1 文 法	205 **	177 **	066	135 *	-003
4			・ L L	235 **	106 *	-125 *	203 **	-050
5			2 会 話	222 **	040	-096 *	181 **	-072
6			実 講 読	057	083	062	066	-075
7				191 **	080	-062	043	-020
8				020	041	-085	-001	-142 **
9			3 選 択	130 *	145 **	-013	062	-082
10			講義・演習	268 **	215 **	044	061	-121 *
11				091	125 *	106 *	-016	-122 *
12			関 連 科 目	298 **	240 **	084	-009	-066
13		一 般 教 育	人 文 科 学	222 **	252 **	069	078	038
14			社 会 科 学	278 **	204 **	028	117 *	037
15			自 然 科 学	273 **	158 **	027	000	-019
16		績	外 国 語 科 目	226 **	238 **	-054	317 **	-038
17			保 健 体 育 科 目	185 **	125 *	-077	001	019
18			取 得 単 位 数	204 **	239 **	-072	050	-049

** $p < .01$, * $p < .05$ 相関係数の小数点を省略

さて、基礎学力各因子のうち第 I 因子「高校学力一般因子」と第 II 因子「国語学力因子」は、大学学業成績変数の多くと統計的に有意な正の相関関係にあり、また第 IV 因子「英語学力因子」も語学関係の変数のいくつかと有意な正の相関関係にある。しかし、第 III 因子「社会学力因子」

と第Ⅴ因子「数学学力因子」はいずれも大学学業成績の2,3の変数と有意な相関を示すにすぎず、しかも負の相関関係がみられる。つぎに、これらの相関関係の意味を検討する。

基礎学力第Ⅰ因子「高校学力因子」の因子スコアは、専攻科目の実習第3課程の会話と講読、卒業論文を除くすべての大学学業成績変数と有意な正の相関関係にある。とりわけ、専門教育の関連科目との相関がもっとも高く、一般教育の人文科学・社会科学・自然科学、専攻科目の講義・演習、外国語科目、実習第1・第2課程、取得単位数などと.2以上の相関を示している。このことは、「高校学力一般因子」が、大学においてもなお、一般的な基礎学力として、さまざまな学業成績に影響を及ぼしていることを示唆する。

基礎学力第Ⅱ因子「国語学力因子」の因子スコアも、実習第1・第2課程の会話、第3課程の会話・講読・作文を除いたすべての大学成績変数と有意な正の相関関係にある。なかでも一般教育科目の人文科学・社会科学、関連科目、専攻の講義・演習、外国語科目、取得単位数と.2以上の有意な正の相関を示す。この因子もまた、第Ⅰ因子と同様に、広範囲の大学成績にかなり基礎的な学力因子としての影響を及ぼしていることが示唆される。

基礎学力第Ⅳ因子「英語学力因子」の因子スコアは、外国語科目ともっとも高い相関関係にあり(.317)、実習第1・第2課程の作文・文法・LL・会話、一般教育科目の社会科学と有意な正の相関を示している。しかしそのほかの大学成績とはほとんど相関がなく、とりわけ同じ語学関係の成績である実習第3課程ともほとんど相関がないということは注目に値する。この因子は、専攻語学の実習第1・第2課程に基礎学力としての影響がみられるが、さらに上級の実習第3課程にはあまり関与していないことを示唆する。

基礎学力第Ⅲ因子「社会学力因子」の因子スコアは、卒業論文とわずかながら有意な正の相関関係にあり、卒業論文と社会基礎学力との関連が示唆された。しかし、実習第1・第2課程のLLと会話との間に有意な負の相関を示すほかは、大学成績とはほとんど相関がない。また、基礎学力第Ⅴ因子「数学学力因子」の因子スコアも、実習第3課程の会話、専攻の講義・演習、卒業論文と負の相関を示すほかは、他の変数とほとんど相関がない。

3) 専攻語学を中心とする大学学業成績の因子構造

専攻語学の実習成績を中心とする大学学業成績18変数間の内部相関行列および基礎学力各因子間の内部相関行列をTABLE 3とTABLE 4に示す。これらの内部相関行列とTABLE 2の基礎学力各因子と大学学業成績との相関行列を一つにまとめた、23×23変数間の内部相関行列にもとづいて因子分析を行ない、TABLE 5の因子負荷行列を求めた。

因子抽出の基準を固有値1.0以上とすると6因子が抽出され、第5因子までを次のように解釈し、命名した。

A因子(第1因子)は、大学学業成績のかなり広い範囲の変数に負荷している。すなわち、専門教育科目では関連科目を中心に、専攻の講義・演習、実習第3課程の作文、一般教育科目では

TABLE 3 大学学業成績各変数の内部相関行列

変 数				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
1	専 門 攻 教 育 科 目	専 攻 科 目	実 講 読																	
2			習 作 文	373																
3			1 文 法	394	321															
4			・ L L	306	357	262														
5			2 会 話	289	352	318	360													
6			実 講 読	279	291	260	211	212												
7				279	362	240	234	319	203											
8				127	185	127	186	104	181	257										
9			3 選 択	320	381	370	324	395	466	393	268									
10			講義・演習	402	350	370	324	300	250	373	255	453								
11				149	238	165	203	201	209	113	178	209	351							
12			卒 業 論 文	248	258	236	222	206	186	247	164	344	402	230						
13			関 連 科 目	268	333	373	171	256	133	209	030	238	251	143	393					
14	一 般 教 育	人 文 科 学	234	253	238	235	285	053	302	059	211	248	163	305	369					
15		社 会 科 学	129	232	163	246	139	106	176	114	242	264	112	355	346	278				
16		自 然 科 学	379	442	413	365	361	227	318	086	382	392	156	270	347	331	133			
17	外 国 語 科 目		163	205	163	212	114	159	330	245	391	338	061	374	189	218	330	197		
18	保 健 体 育 科 目		274	303	219	187	200	104	294	107	296	356	183	412	285	234	182	300	316	

表中の相関係数は、小数第4位を4捨5入し、小数点は省略した。なお、相関係数.18以上は0.1%水準で有意、.14以上は1%水準で有意、.10以上は5%水準で有意。

TABLE 4 基礎学力各因子の因子スコアの内部相関行列

変 数		19	20	21	22
19	高校学力一般因子				
20	国 語 学 力 因 子	104 *			
21	社 会 学 力 因 子	113 *	-010		
22	英 語 学 力 因 子	212 **	-061	009	
23	数 学 学 力 因 子	089	-175 **	002	012

** $p < .01$, * $p < .05$ 相関係数の小数点を省略

自然科学と社会科学、さらに保健体育と取得単位数に負荷している。一方、基礎学力因子では「高校学力一般因子」に負荷を示すが、英語学力因子など教科別の学力因子には負荷しない。また大学成績でも外国語科目、実習第1・第2課程にはほとんど負荷を示さない。したがって、この因子は外国語とはあまり関係のない、しかし高校・大学に共通するところのきわめて基礎的な学力因子と解釈される。仮に「基礎学力因子」と命名する。

B因子（第2因子）は、専攻語学実習の第1・第2課程と第3課程を中心に、専攻の講義・演習、外国語科目に負荷している。基礎学力各因子にはほとんど負荷がなく、大学成績では語学関係の変数に負荷しているにもかかわらず、英語学力因子にも負荷しない。したがって、この因子は大学レベルにおける外国語学に関する因子と解釈される。仮に「専攻語学因子」と命名する。

TABLE 5 大学学業成績および基礎学力各因子の因子スコアのバリマックス回転後の因子負荷行列($N=300$)

因 子					A	B	C	D	E	F	h^2
変 数					(基礎学力)(専攻語学)(英語学力)(専門知識)(国語学力)						
1	大 学 成 績	専 攻 科 目	実 習	講 読	.112	.391 *	.287	.068	.272	-.028	.327
2				作 文	.182	.356 *	.399 *	.151	.252	-.050	.408
3			1	文 法	.078	.417 *	.284	.003	.351 *	.107	.396
4				・ L L	.223	.238	.460 *	.179	.056	-.119	.367
5			2	会 話	.117	.320 *	.450 *	.092	.134	-.070	.350
6				講 読	.040	.574 *	.076	.132	.026	.112	.367
7			実 習	作 文	.341 *	.358 *	.215	.049	.110	-.167	.333
8				会 話	.236	.280	.013	.271	-.102	-.139	.237
9			3	選 択	.299	.688 *	.127	.116	.110	-.054	.608
10				講義・演習	.372 *	.379 *	.230	.333 *	.208	.053	.491
11		目	卒 業 論 文		.121	.186	.125	.430 *	.095	.195	.298
12			関 連 科 目		.543 *	.168	.055	.163	.342 *	.136	.488
13			一 般 教 育	人 文 科 学	.266	.153	.181	-.090	.567 *	.146	.478
14				社 会 科 学	.330 *	.055	.307 *	-.017	.335 *	.035	.320
15				自 然 科 学	.493 *	.070	.097	.022	.184	.094	.300
16	績	外 国 語 科 目		.080	.321 *	.502 *	.053	.404 *	-.116	.541	
17		保 健 体 育 科 目		.630 *	.268	-.031	-.031	.055	-.182	.507	
18		取 得 単 位 数		.357 *	.158	.117	.143	.345 *	-.117	.320	
19	基 礎 学 力 因 子 ス コ ア	高校学力一般子			.390 *	-.032	.419 *	-.055	.101	.221	.391
20		国語学力因子			.131	.012	-.031	.245	.461 *	-.030	.291
21		社会学力因子			.003	.017	-.051	-.003	.018	.544 *	.299
22		英語学力因子			-.046	.031	.482 *	-.084	-.014	.007	.243
23		数学学力因子			.046	-.047	.050	-.403 *	-.051	.057	.175
固 有 値					5.217	.935	.896	.621	.473	.392	8.534

因子負荷量.300以上を解釈の主たる対象とし、*印を付した。

C 因子 (第 3 因子) は、大学成績では外国語科目と専攻語学の実習第 1・第 2 課程を中心かなりの負荷を示している。しかし実習第 3 課程にはあまり負荷がみられず、わずかに一般教育の社会科学に負荷がある。上述の第 2 因子が基礎学力因子に負荷がなかったのに対して、この因子は英語学力因子を中心に高校学力一般因子にも負荷している。したがって、この因子は基礎的な「英語学力因子」と考えられる。

D 因子 (第 4 因子) は、大学成績の卒業論文、専攻の講義・演習に負荷し、国語学力因子に負荷の傾向を示し (.245)、数学学力因子とは負の負荷を示している。専攻科目の講義・演習は、専攻する外国語を主たる国語とする外国の文化に関する知識の習得を授業目標としており、卒業論文も専攻外国語に関するものか外国の文化を中心とする題目に関するものとされている。したがって、この因子は仮に「専門知識因子」と命名解釈する。

E 因子 (第 5 因子) は、大学成績では一般教育科目の人文科学と社会科学、外国語科目、専門教育科目の関連科目、実習第 1・第 2 課程の文法、取得単位数に負荷を示し、基礎学力では国語

学力因子の因子スコアにかなり負荷している。したがって、この因子は「国語学力因子とみなされる。

なお、F 因子（第 6 因子）は、基礎学力としての社会学力因子にかなりの負荷を示しているが、大学学業成績各変数とは .2 以下でほとんど負荷がない。大学成績との関連において、この因子を解釈することはできない。

以上のように、専攻語学を中心とする大学学業成績を構成する学力因子は、「基礎学力因子」「専攻語学因子」「英語学力因子」「(外国文化の)専門知識因子」「国語学力因子」の 5 因子からなることが見い出された。この中でもっとも大きな因子である「基礎学力因子」は、第 I 報の「高校学力一般因子」と先の研究（大澤，1977・1978b）で「外国語学部学力因子」と仮に命名した因子とが複合したものと考えられる。いずれにせよ、高校各教科に共通して得られた因子が大学成績のさまざまな科目に共通した学力因子とともに見い出されたことになる。また、専攻語学に関係する因子は、「専攻語学因子」と「英語学力因子」であることが見い出され、前者は専攻語学実習の基礎から応用に至る外国語学の因子であり、入試や高校調査書成績とは無関係なのに対し、後者は専攻語学の基礎的な段階を支えている因子であるといえる。

要 約

外国語学部学生の専攻語学を中心とした学力構造を明らかにするために、1972～1974 の各年度に入学し、1975～1977 の各年度に卒業した者から、英語・イスパニア語・ロシア語の 3 学科男女各 50 名ずつ無作為に抽出した合計 300 名を対象とし、入学試験成績 11 変数・高校調査書成績 7 変数・大学学業成績 18 変数を統計的に分析した。

1) 入学試験と高校調査書の成績を、高校での学習到達度を示す大学教育のための基礎学力とみなし、これら 18 変数の因子分析（主因子法→バリマックス回転）から、外国語学部学生の基礎学力は、因子の大きさの順に「高校学力一般」「国語学力」「社会学力」「英語学力」「数学学力」の 5 因子から構成されていることが確かめられた。また第 I 報の受験者群との比較から、外国語学部学生にとって「国語学力」因子が学力上の重要な役割をもつと示唆された。

2) これら基礎学力 5 因子の因子スコアと大学学業成績各変数との相関（ピアソンの偏差積率相関係数）を求めたところ、「高校学力一般」と「国語学力」の 2 因子は大学学業成績変数の多くと正の相関関係にあり、大学においてもなお一般的な基礎学力として広範囲の学業成績に影響を及ぼしていることが示唆された。また「英語学力」因子は語学関係の変数の一部と正の相関を示し、とくに専攻語学の実習第 1・第 2 課程での基礎的な学力としての影響が示唆された。「社会学力」因子は卒業論文とわずかながら正の相関を示したが、「数学学力」因子ともども大学成績との明確な関連は見い出せなかった。

3) 専攻語学を中心とする大学学業成績 18 変数および上述の基礎学力 5 因子の因子スコア 5 変

数の合わせて23変数の因子分析から、つぎの5因子が解釈された。第1因子「基礎学力因子」は高校大学に共通するところのきわめて基礎的だが外国語とは関係のない学力因子である。第2因子「専攻語学因子」は、専攻語学実習第1課程から第3課程までと関係する大学での外国語学力の因子である。これに対して第3因子「英語学力因子」は専攻語学の実習第1・第2課程と外国語科目に関係する。第4因子「専門知識因子」は卒業論文と専攻の講義演習に、第5因子「国語学力因子」は一般教育の人文科学と社会科学、関連科目、外国語科目などに負荷している。

このように、外国語学部で達成される学力には、高校での全般的な基礎学力や国語学力の広範な影響がみられ、英語学力は専攻語学実習前半の基礎段階と関係するが実習後半の応用段階では関係がみとめられない。結局、本研究における外国語学部学生の学力構造は、「基礎学力」「専攻語学」「英語学力」「(外国文化の)専門知識」「国語学力」の5因子で説明されることが示された。

文 献

- 木下敏弥 1971 学力論争の展開 肥田野直・稲垣忠彦編：教育課程（総論）《戦後日本の教育改革 第6巻》第2部第3章 591～620. 東大出版会
- 西堀道雄 1978 展望 入試に関する教育心理学的諸問題 I 大学入試. 教育心理学年報 第17集 117～126.
- 大阪外大入学者選抜方法研究委員会 1976 調査研究報告書（昭和51年度）
- 大澤春吉 1977 大学における外国語学力の分析(I)－大学成績・入試成績・高校成績の相関的分析－ 日本教育心理学会第19回総会発表論文集, 786～787.
- 大澤春吉 1978 a 外国語学部学生の学力構造 I－大学成績と入試成績・高校成績の関係－ 大阪外国語大学学報, 40, 77～88.
- 大澤春吉 1978 b 大学における外国語学力の分析(II)－専攻語学実習成績と高校・入試・大学成績の因子分析－ 日本教育心理学会第20回総会発表論文集, 700～701.
- 清水利信 1978 学力構造の心理学 金子書房
- 続 有恒 1973 教育心理学の探求 金子書房